

地域課題としての「ひきこもり」：それは日本特有の現象か －外国人観光客対象のアンケートを通して考える－

藤本 文朗*，主馬 建之助**，大槻 明美***，上坂 秀喜***

要約

私たちは「ひきこもりは日本特有の現象か」という仮説について、京都を訪れる外国人観光者（154名、33ヶ国）にアンケート調査（英文）を直接行った。同時に日本人（269名）に同じ項目のアンケート調査をした。結果は私たちの仮説はアンケートとはいえ、肯定的に実証された可能性が高いと考える。すなわち、日本人はひきこもりをほぼ100%知っていて、身近に20%の人がいると答えている。外国人はひきこもりというwordは知っている人は33%で、あなたの国にいるかは44%がyesであった。特に、韓国人の77%はyesと答えている。

欧米・アジアでもひきこもりは存在することがわかった。ひきこもりの原因について外国人は甘え8%、親の育て方22%、教育の問題17%、社会構造など57%、との答えだった。いずれにせよ日本では突出して多いことが判明した。

キーワード：ひきこもり 観光外国人 アンケート調査

2017年10月6日受理（調査報告）

1、本研究の目的

内閣府が2010年に実施した「若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）」によると、「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」に該当した「狭義のひきこもり」は23万6,000人、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」「準ひきこもり」が46万人、それらを合わせたいわゆる広義のひきこもりは70万人近いと推計されている¹。2016年に出版された関連文献では、その数は約100万であるとの推計もある²。単純に考えれば、その100万人には200万人近い親が存在し、兄弟や祖父母を含めれば、ひきこもり問題を親族に抱える家族はさらに膨大な数にのぼる。さらに、実際に現在ひきこもっている「現役」だけでなく、その途上にある「予備群」や、「ひきこもりの気持ちがわ

かる」といった「親和群」を合わせると、日本において途方もない数の人たちがこの問題に直面している可能性が考えられる。

この事実だけを考えても、我が国におけるひきこもり問題への対応は急務と言えるであろう。実際、国や地方自治体も相当な危機感を抱いていることが窺える。例えば、厚生労働省は、平成21年度から新たに「ひきこもり対策推進事業」を創設し、ひきこもり問題に特化した専門的窓口である「ひきこもり地域支援センター」を全国に開設している。本研究の調査が実施された京都府においても、ひきこもり地域支援センターを中心とした支援活動が精力的に展開されており、とりわけ、ポータルサイトを通じた情報提供や自助グループの連携などの取り組み³が積極的に行われている。こういった問題意識の高まりは、学術領域におけるひきこもり研究の蓄積にも反映されている。そ

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：藤本 文朗

大阪健康福祉短期大学 名誉教授

**京都市民大学院

*** 東山区 不登校・ひきこもりを考える親の会

の射程は、医学・社会福祉学・心理学から社会学・教育学に及び多彩であるが、特に顕著な業績としては、2010年度から2012年度に行われた「日仏ひきこもり比較共同研究」⁴を挙げることができるであろう。これは、日仏両国の学際研究者チームによって実施されたもので、各国の事例研究に加え、ひきこもり当事者の家族背景、経済状況、社会文化的背景、個々の精神病理、精神症状の有無について精神医学的、社会学的、人類学的、哲学的、心理学的な視角から分析がなされている。その上で、ひきこもりという現象そのものの本質について、社会学的、人類学的、精神医学的、哲学的観点で丹念な考察が試みられている。無論、こういった大規模かつ横断的な国際比較研究に比べ、本研究は、その範囲においても深度においても相対的に凌駕できるわけではない。しかし、そこに本研究が内包する意義や新規性が存在するのではないかと考える。それについては、最後にまとめる。

本研究で調査活動にも携わった「東山区 不登校・ひきこもりを考える親の会」(以下、「親の会」)はこれまで15年以上にわたりひきこもり問題を抱える家族や当事者と向き合ってきた。「親の会」の現場における経験やこの問題に直接関与する実務家・研究者らの知見は、これまで、『ひきこもる人と歩む』⁵、『何度でもやり直せる—ひきこもり支援の実践と研究の今』⁶といった出版物にまとめられている。こういった経験や活動、親・当事者・研究者・医師ら専門家との議論から、本研究の主体は、ひきこもり問題が家族内部の問題ではなく社会的な課題であること、そして、この問題を抱える家族が、何よりもひきこもる当事者が、充実した人生を歩むために何が助けとなるか、といった情報を共有してきた。しかし、さらに多くの実際的な知恵を得ようとより視野を広げてみると、日本以外ではひきこもり問題にどういった方策で取り組んでいるのであろうかという疑問が生じる。上述の日仏比較研究のような学術領域では相当の知見が蓄積されていたとしても、あえて「ひきこもる」当事者レベルでその疑問に取り組んでみようというのが本研究のエッセンスである。

ここで、興味深い資料の一つ提示したい。辞書として高い権威を有する『オックスフォード英語辞典』(第3版)に、用語として「hikikomori」が収録されたのである。このことを、2010年8月20日付「日本経済新聞」⁷は次のように報じている。

英オックスフォード大学出版局の英語辞典「オックスフォード・ディクショナリー・オブ・イングリッシュ」の改訂版が2015年9月25日に出版され、新たに収録された単語2000語の中に、日本語の「h i k i k o m o r i (引きこもり)」や、サッカー・ワールドカップ(W杯)南アフリカ大会で応援に使われたラップのような民族楽器「ブブゼラ」などが入った。

「引きこもり」が英語として“認定”されたのは、欧米では若者による「引きこもり」自体が日本のように社会問題化しておらず、英語で正確に表現できる言葉がないことが背景にあるとみられる。

またゲームやアニメといった日本のサブカルチャーと「引きこもり」がイメージ的に重なる点を指摘する声もある。

今回出版されたのは第3版で、語源が日本語の言葉としてはすでに第2版で、「オタク」や「過労死」「ラーメン」「昆布」などが収録されている。

「引きこもり」は、社会との接触を異常なまでに避ける現象とし、一般的には若い男性に多いと説明された。

このことから言えるのは、少なくとも単語としての「ひきこもり」は、日本が世界に発信した用語であるということである。これを踏まえ、本稿執筆者の一人であり「親の会」にも関与する藤本は、『日本の科学者 2016年6月号』において、「ひきこもりは日本特有の現象か」と題し仮説的なテーマ設定を試みた。そこで、藤本は、「ひきこもりは、いま日本で100万人以上といわれ社会問題化しているが、研究の歴史は浅い。本稿では、なぜ日本社会で特有かを探るため、文献的検討をおこなった。そのルーツは「文明論」的にいえば古くから存在したともいえるが、社会問題化したのは1990年代後半で新自由主義の矛盾を反映した結果といえる。国際的研究の動向をみると、欧米でも存在はするが、社会問題化はしていない。今後、問題化する可能性があるといわれている。仮説的にいえば、ひきこもりは、日本型新自由主義の矛盾から生じたといえるだろう」と問題を提起した⁸。

その意味で、本研究は、藤本の問題意識に基づく実証の第一歩であり、「親の会」が活動拠点とする京都市東山区周辺に訪れた外国人観光客に対し、アンケート形式の調査を実施した結果報告である。京都東山には清水寺や高台寺といった京都を代表する世界的観光

地が集中している。そこに訪れた外国人と比較調査対象としての日本人⁹⁾に「親の会」関係者らがアンケート用紙を提示し、夏の短期間ではあるが直接、回答を得た。これまで、管轄省庁が実施してきたひきこもり関連の調査と対照的に、ひきこもり当事者とその家族が調査を担当していることも画期的である。そういった言わば人力を駆使した調査背景のためサンプル数には限界を包含しているが、より実態的な調査とも言える。

2、調査概要

(1) 調査主体

・「東山区 不登校・ひきこもりを考える親の会」を中心とした当事者、親が調査員として対面によりアンケート用紙（P.89, 90参照）の質問に答えてもらうという形で実施

(2) 調査対象

・主に京都市東山区周辺の外国人観光客および日本人
 ・協力大学における日本人学生を対象とした調査：2大学

(3) 調査期間・日時

・2017年6月～8月
 ・第1回：6月19日 午前10時～12時 清水寺付近 調査員6名
 ・第2回：7月10日 午前10時～12時 清水寺付近 調査員6名

調査員6名

- ・第3回：7月24日 午後2時～4時 東山区役所付近 調査員6名
- ・第4回：8月21日 午後2時～4時 東山区役所付近 調査員8名
- ・その他：バス車中、街頭等で随時実施

(4) 調査項目

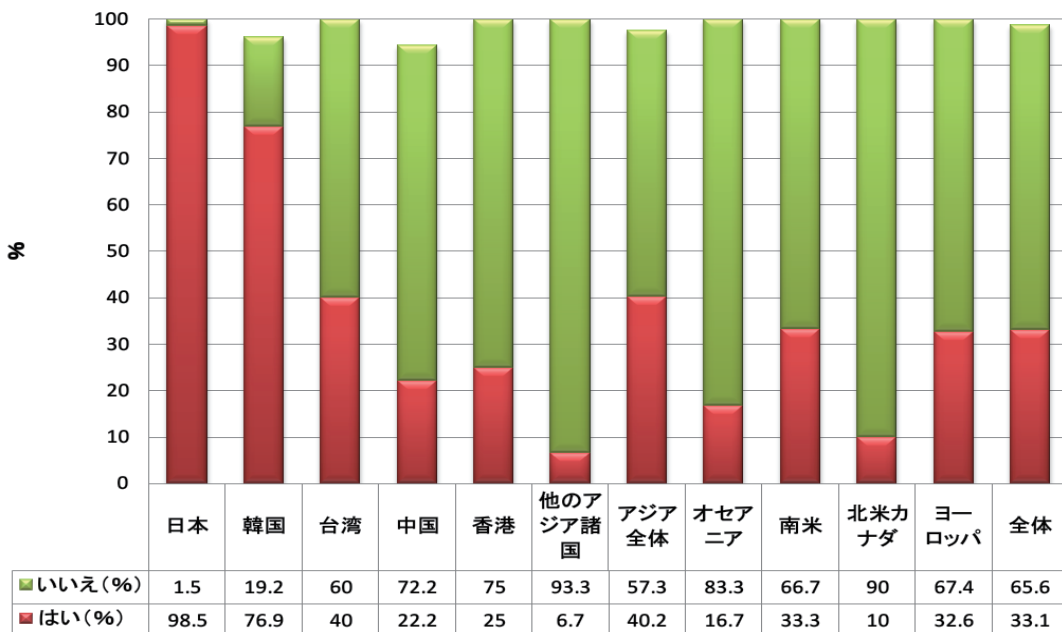
- ・題名：ひきこもり意識調査
 - ・質問項目（英語版）
 1. 「ひきこもり」という言葉を知っているか？
 2. あなたの国でも「ひきこもり」の人がいるか？
 3. なぜ日本にはひきこもりの人が多いのか、あなたはどう思うか？
 - ・質問項目（日本語版）
 1. 「ひきこもり」という言葉を知っているか？
 2. 「ひきこもり」はどんなイメージか？
 3. 「ひきこもり」の原因は何だと思われるか？
 4. 「ひきこもり」を抜け出す方法は何か？
 5. 知り合い、近所に「ひきこもり」の方がいるか？
- ※各項目について回答を選択、または筆記する方法で実施

3、調査結果

※調査結果より筆者作成

個別の集計については文末に別紙添付するが、調査人数の内訳は、韓国：26人、台湾：15人、中国：18人、

図1 「ひきこもり」を知っているかに関する調査結果



香港：8人、他のアジア諸国（インド、インドネシア、シンガポール、スリランカ、ベトナム、マレーシア）：15人、オセアニア（オーストラリア、ニュージーランド）：6人、南米（ブラジル、メキシコ）：3人、北米カナダ：20人、ヨーロッパ（イギリス、アイルランド、イタリア、オランダ、スイス、スコットランド、スペイン、チェコ、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フランス、ポルトガル、ロシア）である。

4、考察

(1) 「ひきこもり」の認知

日本人回答者：269人のうち98%は「ひきこもり」という言葉を知っていて、身近にいるという人も19%すなわち5人に一人に達する。それに対して、外国回答者：154人（32カ国）のうち“HIKIKOMORI”という単語を知っていると回答した人は51人（33%）に過ぎない。

さらに、外国人版：問2の質問でオックスフォード英語辞典を引用し、あなたの国で「ひきこもり」はあるかと尋ねた質問には、154人のうち66人（44%）が「Yes」と回答し、質問1の「ひきこもり」単語認知率より若干の増加が見られるものの、これは調査員が「ひきこもり」という言葉についてその場で口頭により簡単に説明し、その結果同様の問題が自国でも存在すると認識した結果をも反映しているためである¹⁰。

無論、本アンケートは回答者の意識を尋ねたものであり、実態を（おおそ反映しているではあろうが）精査したものではない。しかし、この調査結果からは、少なくとも「狭い意味での」ひきこもりは、日本にだけ存在するものではないが、日本に突出して多い現象であると言えるであろう。本調査には、サンプル数の限界や、外国現地での調査ではなく、主に観光目的で来日した人≒多少なりとも日本に関心を持っている人≒日本事情や社会問題を知っている人が回答しているという問題は潜在する。しかし、この結果から、われわれが本研究にあたり提起した「ひきこもりは日本特有の現象か」という仮説は、ほぼ肯定的に実証されたと言えないだろうか。ただし、先ほど「狭い意味での」と但し書きしたのには理由がある。それを国別の傾向から説明する。

(2) 国別の傾向

冒頭でも紹介したように、日本にひきこもりが100

万人存在するのは、実務家や研究者の共通認識である。回答者が生活する諸外国の様子をもう少し概観してみよう。

①韓国からの回答者は、77%が「ひきこもり」という言葉を認知しており、今回の調査では突出して高い割合を示した。韓国では日本語の「引き籠もり」を訳し、「은둔형」漢字では「隠遁型」（一人ぼっちという意味）と表記される。こういった言葉が存在することと合わせ、回答者の傾向から推測しても、日本に次いでこの問題が多いのは韓国であることは間違いなさそうである。

②アメリカでは、拳銃発砲や薬物依存症などいわば「antisocial」な問題に対する社会的関心が高い。では、ひきこもりのような、「asocial」な問題についてはどうであろうか。本調査において極めて特徴的であったのは、北米カナダの回答者の90%は「ひきこもり」という言葉を知らず、認知していたのは、わずか1割しかいなかったということである。にもかかわらず、「同様の問題が自国にも存在するか」という質問では、70%が「存在する」と回答している。この「同様の問題が自国にも存在するか」という質問に限って言えば、アジア全体の平均：44%よりも高いのはもちろん、①で報告した韓国（＝「ひきこもり」という言葉の認知率が最も高かった）よりも大きな割合を示している。

このように、韓国においてはひきこもりに該当する用語が発生していること。アメリカではひきこもりと同じ問題の存在が広く認知されていること、この両調査結果を考慮すると広い意味でのひきこもり現象は海外にも存在する可能性が高い。ただ、それが、言わば日本発祥の狭い意味での「ひきこもり」と実態的にどのような相違があるのかについては、未知の領域となる。ここでは、今後の興味深い調査テーマとして提示しておきたい。

③ヨーロッパ在住の回答者からは、NEET（イギリス）、NINI（スペイン）と呼ばれているとの答えがあった。イタリアのミラノには支援団体として“HIKIKOMORIイタリア”があり、いわゆるひきこもりはイタリアに10万人いるとの報道¹¹もあり、やはり、類似の問題がスピードと範囲の違いはあれ、各国で発現傾向にあることが窺える。ただし、北米の場合②で論じたように「ひきこもり」という単語そのものの認知は少数であっても、同様の問題が自国に存在す

ることを意識する人はかなりの割合に上ったのに対し、ヨーロッパの回答結果を見る限りでは、同様の社会問題を意識している人も、単語の認知率とほぼ同水準（3割強）であるということである。その点では、そもそもひきこもることを問題として認識しているかどうかという議論も可能であろう。当然のことながら、地域の資本や地域によるコミュニティ形成の相違、個人や家族に対する社会的価値観の違いなどが、国というおおきなくくりにおいてさえ、ひきこもる行為に対する見方を変化させるであろう。もっと言えば、「ひきこもりは悪なのか」という問いに普遍的な解は存在しないはずであり、この点が本テーマの興味深くも難しい点である。

④台湾では、「ひきこもり」という単語の認知率も、同様問題としての意識率も半数弱ぐらいであったが、ひきこもりは、「啃老族」すなわち「親のお金に頼っている人」、あるいは「家裡蹲」すなわち「家に閉じこもった人」と呼称されているとの回答があった。

⑤英文版の間3では「日本になぜこのような問題が存在するかと思うか」（複数選択可）を質問した。回答結果は、「Spoil：7.8%」「Parents：22.7%」「Education：17.5%」「Society：27.9%」「Other&未回答：37.0%」であった。「Other」の項目では聞き取れない場合も多く、可能な限り英文で筆記してもらったが、その中の数人は情報ツールの拡大（例：スマートフォン、SNSなど）を挙げる人が多かった。加えて、社会構造の変化と関連しているという回答もあった。

5、まとめと課題

私たちは「ひきこもりは日本特有の現象か」という大胆な仮説を実証する一つの方法として、京都市東山区を訪ねる外国人観光者（154人32ヶ国）に英文でアンケート調査を試みた。この調査はアンケートレベルであり、学術的には不十分ではないかとの批判もあろう。そういった批判を承知の上で、最後に、本研究の意義を二つほど示しまとめと今後の課題としておきたい。

本研究の意義の第一は、この調査がひきこもり問題に対峙する親や当事者が主体となって実施されたということである。無論、家から一步も外出できない状況にある当事者は参加していない。調査に参加した当事者は、程度の差はあれ、自宅近隣で行われた調査活動に加われる人達である。彼らが実際に街に出て自分や

家族が直面している課題について、自ら「手作りの調査」を企画し、この問題について客観視できる機会を得たそのこと自体に、まず大きな意味がある。ひきこもりの渦中にある当事者や家族は、それこそ渦に巻き込まれもがき苦しむことがある。「親の会」が設立されたきっかけも、言わば溺れてしまわないよう協力しあおうという気づきからであった。調査プロセスを通して、そういった理念を確認しあい、地域社会における身近な問題として明示できるとすれば、それだけで収穫は少なくない。

第二に、今回の調査が、全国的に名の知れた大企業による助成というかたちで支援されていることである¹²。上述のように、今回の調査で「ひきこもり」という単語は、日本を別にすると韓国がもっとも認知率が高いことが明らかになった。しかし、韓国の場合、それが存在する他国よりも相対的に強制度の高い徴兵制があるため、ひきこもりを継続できない事情がある。ここから、ひきこもりを仮に表面的にでも構わないからなくしたいとすれば、政策や制度で対応可能という仮説も提示されうる。これは極論に思えるかもしれないが、裏を返せば、ひきこもり問題の説明変数を本人や家族の属性にだけ求めることの限界を示唆している。このことは、今後のひきこもり研究の方向性に一石を投じる可能性がありはしないか。すなわち、従来型の精神医療や福祉といった領域だけではなく、教育学や社会学的視座はもちろんのこと、CSRのような企業活動や経済活動のあり方から、公共経営や政策制度など、社会や地域が目を向けなければならない問題として引き続き討議する必要性を明らかにしている。本研究はその第一歩であり、今後、各領域の知見を総動員してより精緻な調査研究を継続することが、われわれに突きつけられた課題である。

(Endnotes)

- 1 内閣府webサイト
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_04_02.html#kyaku_019
2017年9月25日閲覧
- 2 斎藤環、2016年、『ひきこもり文化論』、ちくま学芸文庫
- 3 京都府ひきこもり支援情報ポータルサイト
<http://www.kyoto-hikikomori-net.jp/>
2017年11月20日閲覧

- 4 研究代表者 古橋忠晃、2010年～2013年、『日仏ひきこもり比較共同研究』、日本学術振興会科学研究費助成事業 (22402045)
- 5 青木道忠・関山美子・高垣忠一郎・藤本文朗、2015年、『ひきこもる人と歩む』、新日本出版社
- 6 青木道忠・漆葉成彦・藤本文朗、2017年、『何度でもやりなおせる ひきこもり支援の実践と研究の今』、クリエイツかもがわ
- 7 日本経済新聞 (電子版)、2010年8月20日、『「ヒキコモリ」「ブブゼラ」英オックスフォード辞書に』、日本経済新聞社
https://www.nikkei.com/article/DGXNASFK2000J_Q0A820C1000000/
 2017年9月25日閲覧
- 8 藤本文朗、2016年、「ひきこもりは日本特有の現象か」、日本科学者会議編、『日本の科学者2016年6月号 Vol.51』、本の泉社、p24
- 9 日本人を対象とした調査については、周辺に点在する大学のゼミ等において同様アンケート用紙による追加調査も実施した。
- 10 調査員の簡単な説明を聞くと、自国には「少し (a little) 同じような問題がある」と表明するが、割合や統計的数値については、知らないという返事がほとんどであった。
- 11 読売新聞 2017年8月31日 朝刊
- 12 公益財団法人 キリン福祉財団 平成29年度助成

(追記)

- ① 本論文執筆後も個人的 (藤本) に京都市で外国人観光客に“HIKIKOMORI”について約100名余りにアンケート用紙を利用しないで、質問すると“HIKIKOMORI”の理解はパチンコやカラオケの理解が90%余りに比べて、低く10～20%程度である。
- ② 本論文のアンケート調査に“ひきこもり”の人、当事者が多数参加したことは当初は予期しないプロセスであるが意義深い。
- ③ 今回は“HIKIKOMORI”の国際的理解を外国人観光客という間接的アンケートであるが予算が許せばさしずめ日本の次に“ひきこもり”の多い韓国を訪れ調査したいと考える。

(追々記)

私どもの調査でどの国にも“ひきこもり”が存在することがわかったが、なぜ日本と韓国に多いかを考えてみたい。そのこととかわかって日本の研究では、大まかにいってひきこもりの①3分の1は不登校の経験を持つ②発達障害も3分の1③労働者の30～40%が非正規労働者でワーキングプアである。いずれにせよ欧米に比べ教育、家族、地域で個が大切にされていないといえよう。

②について出版のために研究しつつあるが、キューバで発達障害がないとの研究が参考になる。女性の産休がゆっくりして母乳で育てられることが関係しているかもしれない。(「日本の科学者」2017年10月号の本田論文)

③について本研究で多少明らかになったひきこもりの多い国、日本、韓国は儒教の影響が強く「まじめさ」を持った国である。このことがかかわると仮説的に言えないか。

あえて言えば日本はこの問題について韓国に学ぶ必要がある。韓国では「革新学校」が2015年現在600校でき、草の根の学校改革が展開している。(佐藤学『専門家として教師を育てる』岩波書店、2015年、P192-3) この試みが不登校・ひきこもり問題などへの手がかりになると考えられる。

【謝辞】最後になりますが、この論文の日本の「ひきこもり」の調査では、京都華頂大学の西川由紀子教授、大阪産業大学の木村敦教授に、また英文の調査については秦保恵氏 (元高校英語教員) にお世話になりました。

以上

表2 ひきこもり意識調査結果 (対象: 来日外国人)

識別番号	[1]「ひきこもり」という言葉を知っているか? ⇒ ①Yes	[1]「ひきこもり」という言葉を知っているか? ⇒ ②No	[1]「ひきこもり」という言葉を知っているか? ⇒ 未回答	[2]同様の問題があなたの国であるか? ⇒ ①Yes	[2]同様の問題があなたの国であるか? ⇒ ②No	[2]同様の問題があなたの国であるか? ⇒ 未回答	[3]日本社会になぜこの問題が多いと思うか? ⇒ ①Spoil	[3]日本社会になぜこの問題が多いと思うか? ⇒ ②Parents	[3]日本社会になぜこの問題が多いと思うか? ⇒ ③Education	[3]日本社会になぜこの問題が多いと思うか? ⇒ ④Society	[3]日本社会になぜこの問題が多いと思うか? ⇒ ⑤Other & 未回答	[4]年齢 (①10代 & ②20代、③30代、④40代、⑤50代、⑥60代以上、未回答=0)	[5]Country
88	1			1							1	0	韓国
32	1				1				1			10	韓国
12	1			1						1		20	韓国
13	1			1						1		20	韓国
14	1			1						1		20	韓国
28	1			1					1			20	韓国
29	1			1					1			20	韓国
59	1				1			1				20	韓国
64	1			1			1					20	韓国
72		1			1					1		20	韓国
75	1				1					1		20	韓国
78		1			1		1	1	1			20	韓国
81	1			1				1	1			20	韓国
97	1			1						1		20	韓国
123	1					1		1	1			20	韓国
124	1				1				1			20	韓国
131	1			1					1			20	韓国
137		1			1			1				20	韓国
139	1			1						1		20	韓国
142		1			1						1	20	韓国
143	1			1					1			20	韓国
154		1			1						1	20	韓国
80	1				1						1	30	韓国
106	1			1			1					30	韓国
145				1			1					30	韓国
115	1			1				1				40	韓国
韓国小計	20	5	0	15	10	1	4	5	9	7	4		
韓国人数	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26		
韓国比率	76.9%	19.2%	0.0%	57.7%	38.5%	3.8%	15.4%	19.2%	34.6%	26.9%	15.4%		
33		1		1				1				10	台湾
36		1		1					1			20	台湾
61	1			1			1				1	20	台湾
109		1		1					1			20	台湾
132	1				1						1	20	台湾
15		1		1			1					30	台湾
79		1		1				1			1	30	台湾
117	1			1				1				30	台湾
16		1		1							1	40	台湾
35		1		1				1	1			40	台湾
37	1			1						1		40	台湾
38	1			1				1				40	台湾
66	1			1			1					40	台湾
93		1		1							1	40	台湾
34		1		1							1	50	台湾
台湾小計	6	9	0	7	8	0	3	4	3	2	6		
台湾人数	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15		
台湾比率	40.0%	60.0%	0.0%	46.7%	53.3%	0.0%	20.0%	26.7%	20.0%	13.3%	40.0%		
8		1		1					1	1		20	中国
39	1			1					1			20	中国
43	1			1			1					20	中国
83	1			1							1	20	中国
105	1			1							1	20	中国
113	1			1				1				20	中国
116	1			1						1		20	中国
133		1		1				1				20	中国
136	1			1							1	20	中国
141	1			1							1	20	中国
151	1			1					1			20	中国
5		1		1			1				1	30	中国
6		1		1							1	30	中国
7			1	1							1	30	中国
26		1		1				1				30	中国
41		1		1				1				30	中国
42		1		1						1	1	30	中国
92		1		1				1		1		30	中国
中国小計	4	13	1	8	9	1	1	5	3	4	8		
中国人数	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18		
中国比率	22.2%	72.2%	5.6%	44.4%	50.0%	5.6%	5.6%	27.8%	16.7%	22.2%	44.4%		
71		1		1							1	20	香港
73	1			1					1			20	香港
99		1		1							1	20	香港
18		1		1				1				30	香港
40	1			1				1				30	香港
17		1		1			1	1				40	香港
74		1		1				1				40	香港
76		1		1				1				40	香港
香港小計	2	6	0	2	6	0	1	5	1	0	2		
香港人数	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8		
香港比率	25.0%	75.0%	0.0%	25.0%	75.0%	0.0%	12.5%	62.5%	12.5%	0.0%	25.0%		
1		1		1				1				20	インド
65		1		1							1	20	インド
102		1		1			1					30	インド
128		1		1							1	30	インドネシア
9		1		1						1		40	インドネシア
10		1		1				1				20	シンガポール
48		1		1						1		20	シンガポール
111		1		1					1			20	シンガポール
84		1		1							1	30	シンガポール
91	1			1							1	40	スリランカ
45		1		1				1	1			20	ベトナム
11		1		1							1	70	ベトナム
30		1		1			1	1				10	マレーシア
31		1		1						1		20	マレーシア
114		1		1						1		30	マレーシア

実施日: 2017年6月~8月

表2 ひきこもり意識調査結果 (対象：来日外国人)

他アジア小計	1	14	0	4	11	0	2	4	2	4	5	
他アジア人数	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	
他アジア比率	6.7%	93.3%	0.0%	26.7%	73.3%	0.0%	13.3%	26.7%	13.3%	26.7%	33.3%	
アジア小計	33	47	1	36	44	2	11	23	18	17	25	
アジア人数	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	
アジア比率	40.2%	57.3%	1.2%	43.9%	53.7%	2.4%	13.4%	28.0%	22.0%	20.7%	30.5%	
95		1			1						1	20 オーストラリア
130	1			1							1	20 オーストラリア
22		1			1					1		30 オーストラリア
44		1		1				1				40 オーストラリア
60		1			1					1		50 オーストラリア
98		1			1						1	50 ニュージーランド
オセアニア小計	1	5	0	2	4	0	0	0	1	2	3	
オセアニア人数	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
オセアニア比率	16.7%	83.3%	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	33.3%	50.0%	
108	1				1					1		20 ブラジル
25		1		1						1		20 メキシコ
121		1			1				1			30 メキシコ
南米小計	1	2	0	1	2	0	0	0	1	2	0	
南米人数	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
南米比率	33.3%	66.7%	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%	
125	1			1						1		0 USA
68		1			1			1				10 USA
146		1		1							1	10 USA
2		1			1						1	20 USA
24		1		1				1				20 USA
85	1			1							1	20 USA
120		1			1			1	1			20 USA
134		1		1				1				20 USA
49		1		1							1	30 USA
119		1		1							1	30 USA
55		1		1						1		40 USA
104		1		1					1			40 USA
3		1			1			1				50 USA
4		1			1			1		1	1	60 USA
63		1			1					1		60 USA
90		1		1				1		1		60 USA
156		1		1							1	60 USA
19		1		1						1		20 カナダ
20		1		1							1	20 カナダ
140		1		1				1				20 カナダ
北米カナダ小計	2	18	0	14	6	0	0	8	2	6	8	
北米カナダ人数	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	
北米カナダ比率	10.0%	90.0%	0.0%	70.0%	30.0%	0.0%	0.0%	40.0%	10.0%	30.0%	40.0%	
21		1		1						1		20 UK
27		1		1			1					20 UK
94		1			1						1	40 UK
118		1		1							1	20 UK
62	1				1			1				50 UK
135		1		1						1		50 UK
54		1		1							1	30 アイルランド
153	1			1						1		30 アイルランド
86	1			1							1	40 アイルランド
129		1			1						1	20 イタリア
57	1			1							1	30 イタリア
150		1		1							1	40 イタリア
53		1		1				1				20 オランダ
126		1		1							1	40 オランダ
67		1		1							1	30 スイス
58	1			1						1	1	20 スコットランド
96	1			1							1	20 スペイン
100	1			1				1				20 スペイン
127		1		1							1	20 スペイン
69		1		1					1			30 スペイン
138		1		1							1	40 スペイン
144		1		1							1	40 スペイン
101		1		1						1		30 チェコ
51		1		1							1	20 デンマーク
107	1			1					1			20 ドイツ
112	1			1						1		20 ドイツ
77		1		1							1	30 ドイツ
89		1		1							1	30 トルコ
52	1			1				1				30 ルルウェー
50		1		1					1	1		50 ルルウェー
147		1		1							1	30 ハンガリー
46		1		1					1	1		20 フランス
47	1			1						1		20 フランス
56	1			1					1	1		20 フランス
87		1		1							1	20 フランス
103		1		1							1	30 フランス
148		1		1							1	30 フランス
110	1			1						1		40 フランス
152		1		1						1		50 フランス
23		1		1						1		20 ポルトガル
122		1		1						1		20 ロシア
70		1		1							1	30 ロシア
155	1			1						1		60 ロシア
ヨーロッパ小計	14	29	0	15	28	0	1	4	5	16	21	
ヨーロッパ人数	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	
ヨーロッパ比率	32.6%	67.4%	0.0%	34.9%	65.1%	0.0%	2.3%	9.3%	11.6%	37.2%	48.8%	
全合計	51	101	1	68	84	2	12	35	27	43	57	
全人数	154	154	154	154	154	154	154	154	154	154	154	
総比率	33.1%	65.6%	0.6%	44.2%	54.5%	1.3%	7.8%	22.7%	17.5%	27.9%	37.0%	

実施日：2017年6月～8月

調査用紙A (対象：来日外国人)

Excuse me. May I ask you some questions about “hikikomori” that is a big issue in our country now?

We are studying on “hikikomori” who stay indoors all day sometimes for years or more. We’d like to ask visitors from other countries if they have similar problems in their country.

①Do you know the word “hikikomori”? yes no

②In Japan “hikikomori” means those staying indoors all day for more than half a year without working nor going to school over fifteen. They don’t have mental problem. In our country we have “hikikomori” about one million (one percent of the population or more)

Oxford Dictionary of English

hikikomori

(In Japan) the abnormal avoidance of social contact, typically by adolescent males
a person who avoids social contact

Origin: Japanese, literally ‘staying indoors, (social)withdrawal’

Do you have the same problem in your country? yes no

How about homeless people or unemployed?

③Why, do you think, our society has so many “hikikomori”?

1. He/She must be spoilt.
2. Parents take care of him/her too much.
3. Education is not appropriate in school.
4. Our society itself has problems a lot.
5. Others

your age 20s 30s 40s 50s 60s 70s~

your country ()

ひきこもり意識調査

東山ひきこもり研究会

代表 藤本文朗 (滋賀大学名誉教授)

連絡先：電話 07056753408

□に✓を入れてお答えください。(原則1つお選び下さい)

①「ひきこもり」という言葉をご存知ですか。 はい□ いいえ□

②「ひきこもり」はどんなイメージですか。(複数可)

- ・自分の部屋に閉じこもっている □
- ・自分の部屋からは出てくるが、家からは一步も出ない□
- ・外出できる。□ ・買い物はできる□
- ・家族とも誰とも話さない□・家族だけとは話す□
- ・親しい友達とだけ話す□
- ・甘えている□ ・怠けている□ ・とても苦しんでいる□
- ・その他 ()

③「ひきこもり」の原因は何だと思われますか。

- ・本人の問題□ ・親の育て方の問題□ ・教育の問題 □ ・社会の問題□
- ・精神的な病気□
- ・その他 ()

④「ひきこもり」を抜け出す方法として。

- ・本人の努力 □ ・家族で解決する□ ・病院にかかる□
- ・行政(役所等)に相談する□
- ・その他 ()

⑤お知り合い、近所に「ひきこもり」の方(15歳～65歳くらい)はおられますか。

- ・はい□ ・いいえ□

最後のアンケートにお答えいただいた方への質問です。

- ・男性 □ 女性 □
- ・年齢 10代□ 20代□ 30代□ 40代□ 50代□ 60代□ 70代以上□
- ・現在どこにお住まいですか。 京都市□ 京都府□ その他 ()

ご協力ありがとうございました。

***"Hikikomori"* as a regional issue:
Is it a phenomenon peculiar to Japan?
– An inquiry based on questionnaires of foreign tourists –**

Fujimoto Bunrou*, Shume Kennosuke**, Ootuki Akemi***, Uesaka Hideki***

Abstract

"Hikikomori" or "acute social withdrawal" is one of the most prevalent social phenomena in Japan. "Only Japan has *hikikomori*" was the hypothesis we had. To examine this, we asked visitors in Kyoto (154 people from 33 countries) to fill out questionnaire in English, 269 Japanese to answer the questionnaire in Japanese. The results largely confirmed our hypotheses.

All Japanese knew of *"hikikomori"* and 20 percent of them had a *"hikikomori"* person(s) near them. Of the visitors, 33 percent knew the word "hikikomori" and 44 percent said there were some around them. Among Koreans, 20 persons out of 26 said that there were *"hikikomori"* in the neighborhood. We realized that *"hikikomori"* is not only in Japan, but also in Europe and Asia to some degree. Now we know that *"hikikomori"* is a big issue in Japan. We need to study what creates *"hikikomori"* and how to solve this problem.

Key words: Hikikomori, questionnaire, visitors in Kyoto

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Fujimoto Bunrou
Osaka College of Social Health and Welfare Education Learning Doctor
**Graduate school of Kyoto citizen
***Higashiyamaku futoukou·Hikikomori wo kangaeru oyanokai